

太宰治と中国古典(二) : 太宰治の「竹青」と「聊齋志異」の「竹青」との比較

劉, 金宝
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24638>

出版情報 : *Comparatio*. 15, pp.44-53, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

太宰治と中国古典(二)

―太宰治の「竹青」と「聊齋志異」の「竹青」との比較―

劉 金宝

はじめに

太宰治の作品と中国古典の比較研究の一環として、本稿では、太宰治の「清貧譚」と「聊齋志異」の「黄英」との比較(注1)に引き続き、太宰治の「竹青」と「聊齋志異」の「竹青」とを比較してみたい。

「竹青」は、昭和二十年四月一日発行の「文藝」第二巻第四号に発表された。初出「竹青」本文末尾には、「自注。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である。」とあったが、実際に漢訳されたかどうかは、不明である。昭和十九年八月二十九日付堤重久宛葉書に、「そろそろ魯迅に取り掛かる。いまは小手調べに支那の怪談など試作してゐる。これは支那語に翻訳される筈」という一節がある。ここに「支那の怪談など試作」といつているのが「竹青」と推測される。だが、他の作品であった可能性も、考えられないことはない。ともあれ、この時点で、「支那の怪談」は、「支那語に翻訳され」、華文芸雑誌「大東亜文学」(注2)に掲載されることになっていたらしい。昭和十九年九月一日発行の「文学報国」第三十四号の「華文芸雑誌『大東亜文学』創刊―堂々たる編輯内容―」に「創刊号は十

月初旬現地に於いて発売されるが、次号(十一月号)の内容も既に整へられてゐる」と記されている。「支那語に翻訳され」た「支那の怪談」は、「大東亜文学」の第三号か第四号かに掲載される予定になっていたのであろう。だが、「日本文学報国会編輯」と銘打った「大東亜文学」第一号は昭和十九年十一月一日発行で、第二号は昭和十九年十二月一日発行であるが、敗戦後の混乱に紛れてその消息が不明となり、現在第三号以降は発見されていない。

「竹青」はその四年前に書いた「清貧譚」と同じく「聊齋志異」から材料を取った翻案小説である。太宰の使用した底本は「清貧譚」と同じく公田連太郎注・田中貢太郎訳「聊齋志異」(北隆堂、一九二九年十一月)である。翻案の資料はもうひとつある。菊田義孝によれば、「昭和十九年の秋ごろ(略)訪問すると、その机辺に、出版社の名を忘れたが、『世界地理大系』といったものの一冊で、『支那の部』にあたるものが開いたままで置いてあるのが目に付いた。そのページの中の、一つの写真をちよつと指さして、『これが洞庭湖だよ』と言ったのをかすかに記憶している。『竹青』の中で(略)あの描写をするために、あの人はそんな印刷不鮮明の、見ばえもしない写真をながめながら、イメージをつくりつつあったのかもしれない」(注3)という。大野正博によると、この本は『世界地理風俗大系』の第三巻『支那篇下』(新光社、一九三〇年七月)であるという。太宰はこれによってイメージをつくるよりも描写そのものを借りたと大野は考えている(注4)。つまり太宰は地理概念を把握すると同時に描写の重要資料として『世界地理

風俗大系』を使用したのである。

一、「聊齋志異」の「竹青」と異なる点

(1)

ひとりの酒くらひの伯父が、酔餘の興にその家の色黒く瘦せかけた無學の下婢をこの魚容に押しつけ、結婚せよ、よい縁だ、と傍若無人に勝手にきめて、魚容は大いに迷惑ではあつたが、この伯父もまた育ての親のひとりであつて、謂わば海山の大神人に違ひないのであるから、その酔漢の無禮な思ひつきに對して怒る事も出来ず、涙を泳え、うつろな気持で自分より二つ年上のその瘦せてひからびた醜い女をめとつたのである。女は酒くらひの伯父の妾であつたといふ噂もあり、顔も醜いが、心もあまり結構でなかつた。魚容の學問を頭から輕蔑して、魚容が「大學の道は至善に止るに在り」などと口ずさむのを聞いて、ふんと鼻で笑ひ、「そんな至善なんてものに止るよりは、お金に止つて、おいしい御馳走に止る工夫でもする事だ」とにくにくしげに言つて、「あなた、すみませんが、これをみな洗濯して下さいな。少しは家事の手助けもするものです」と魚容の顔をめがけて女のごれ物を投げつける。「竹青」

妻和氏。苦不育。每想一見漢産。生以情告女。女乃治任。送兒從父歸。約以三月。既歸。和愛之。過於己出。逾十餘月。不忍令返。(「聊齋志異」、『支那文学大観』第十二卷、支那文学大観刊行

会、一九二六年三月、六五頁。以下は聊齋原文と略称)

魚容の妻の和氏は、子供がないので何時も漢産を見たがつてゐた。魚はそれを竹青に告げた。竹青はそこで旅行の支度をして、漢産を魚につけて歸した。それは三箇月と云ふ約束であつた。歸つて来ると、和は自分の生んだ子以上に可愛がつて、十箇月が過ぎても返さなかつた。(田中貢太郎訳「竹青」、『支那文学大観』第十二卷、支那文学大観刊行会、一九二六年三月、一六三頁。以下は田中訳と略称)

「聊齋志異」の「竹青」における妻に関する記述はこれだけであるが、これらの記述から見ても、彼女には二つの特徴があることがわかる。一つは子供が好きな点にある。そのことは、竹青の子供の漢産を「自分の生んだ子以上に可愛がつて」という描写から窺える。自身が不妊であるということが彼女がとくに子供に執着する原因の一つであろう。もう一つは寛容さがあるという点である。魚容が妾を困つたり、妾の竹青と子供を作つたりしても、彼女が怒つたり責めたりしたことがないという点から、そう考えられる。

それに対して太宰の「竹青」においては、妻のことはまず外見について「色黒く瘦せこけ」て「顔も醜い」と書かれている。またその外見に加えて、「心もあまり結構でなかつた」と書かれている。妻の悪行を作者はまた二つの面から描写している。一つは口の悪さである。魚容の「大學の道は至善に止るに在り」などと口ずさむのを聞くと、ふんと鼻で笑ひ、「そんな至善なんてものに止

るよりは、お金に止つて、おいしい御馳走に止る工夫でもする事だ」とにくにくしげに言つて魚容の理想を冷やかす。もう一つは行動においても魚容を侮辱する点である。「あなた、すみませんが、これをみな洗濯して下さいな。少しは家事の手助けもするもので」と魚容の顔をめがけて女の下ごれ物を投げつける。また冷酷に「さつそく伯父の家庭石を運搬する」ように魚容に命じ、魚容に「川原から大いなる岩石をいくつも伯父の庭先まで押したり曳いたり担いだり」させた。竹青と対照的に、人間的に温厚さを欠き、愚昧である上に冷酷で、恥を知らず、外見的にも内面的にも、好ましくない女性として描かれている。

(2)

「何をおつしやるの。あなたは、まあ、どこへいらしてゐたの？ あたしはあなたの留守に大病して、ひどい熱を出して、誰もあたしを看病してくれる人がなくて、しみじみあなたが戀ひしくなつて、あたしが今まであなたを馬鹿にしてゐたのは本當に間違つた事だつたと後悔して、あなたのお歸りを、どんなにお待ちしてゐたかわかりません。熱がなかなかさがらなくて、そのうちに全身が紫色に腫れて来て、これもあなたのやうないいお方を粗末にした罰で、當然の報いだとあきらめて、もう死ぬのを静かに待つてゐたら、腫れた皮膚が破れて青い水がどつさり出て、すつとからだが軽くなり、けさ鏡を覗いてみたら、あたしの顔は、すつかり變つて、こんな綺麗な顔になつてゐるので嬉しくて、病氣も何も忘れてしまひ、寢床から飛び出て、さつそく家の中のお掃除な

どはじめてゐたら、あなたのお歸りでせう？ あたしは、うれしいわ。ゆるしてね。あたしは顔ばかりでなく、からだ全體變つたのよ。それから、心も變つたのよ。あたしは悪かつたわ。でも、過去のあたしの悪事は、あの青い水と一緒にみんな流れ出てしまつたのですから、あなたも昔の事は忘れて、あたしをゆるして、あなたのお傍に一生置いて下さいな。」

一年後に、玉のやうな美しい男子が生れた。魚容はその子に「漢産」といふ名をつけた。その名の由来は最愛の女房にも明さなかつた。(太宰「竹青」)

君家自有婦。將何以處妾也。不如置妾於此。為君別院可耳。(聊齋原文、六四頁)

あなたのお宅には奥さんがおありでせう、私をどうなさるのです。それよりか私を此所に置いて、別宅にしたほうがよくはありませんか。(田中訳、一六一頁)

由此往来不絶。(聊齋原文、六五頁)
魚はそれからたへず往来した。(田中訳、一六三頁)

本妻と妾の間を自由に往来する魚の幸せは、まさに男性中心の中国社会思想を表している。本妻和氏に竹青の生んだ子女がよく仕えて孝養を尽くした美談が付け加えられ、二人の妻を持ちながら、トラブルも起こらず、魚の幸福な生活を当然のように描いている。

古い中国の妾は日本の妾と異なつて、純粹に子供を生むためのものであり、その限りにおいて妾を持つことは罪悪ではない。むしろ妻・妾の感情の対立を避けることの方が重要なのである。和氏は妾竹青に三人の子を産ませ、そして死んだ。彼女は不幸だったわけではなく、三人の子は一族繁栄を意味するものである。けれども日本においては妾を作るという行為は道徳的な反発を感じさせるであろう。そのために太宰は悪妻の竹青への変身を通して二人を同一化させたり、「聊斎志異」で妾としての竹青の生んだ漢産を変身後の妻が生んだ子供に変えたりして、この問題を巧みに避けたと思われる。

(3)

一年後に、玉のやうな美しい男子が生れた。魚容はその子に「漢産」といふ名をつけた。その名の由来は最愛の女房にも明さなかつた。神鳥の思ひ出と共に、それは魚容の胸中の尊い秘密として一生、誰にも語らず、また、れいの御自慢の「君子の道」も以後はいつさい口にせず、ただ黙々と相變らずの貧しいその日暮しを續け、親戚の者たちにはやはり一向に敬せられなかつたが、格別それを気にするふうも無く、極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた。「竹青」

後和氏卒。漢生及妹皆来躡踊。葬畢。漢産遂留。生携漢生玉佩去。自此不返。(聊斎原文、六六頁)

後、和が死んだ。漢生及び妹の玉佩も皆喪の禮を行つた。葬儀

が畢つて漢産は留り、魚は漢生と玉佩を伴れて出て往つたが、それから返らなかつた。(田中訳、一六四頁)

二つの「竹青」の著しく異なるところは作品の結末の部分である。「聊斎志異」の「竹青」の作者、蒲松齡は中国の清の隆盛時代に生きていたが、地方統治の暗黒と科擧制の腐敗のため、何度も郷試を受けたが、合格できず、官にも出仕できなかった。当時の中国の知識人は官職について国のために才能を尽くすことを最高の理想として信じていたので、蒲松齡は官職につけないことを悔しいと思うようになった。度々落第の現実を経験し、蒲松齡は次第に科擧制度の暗黒さと不公平の横行に気がついた。「竹青」のなかの魚容が拳人になつたことは蒲松齡の願望を反映している。その一方で道教的な仙界飛翔の夢を「竹青」に仮託し、魚容が仙境にいくことは作者の現実社会に対する心情を表している。主人公が半人間世界、半分仙境での生活から完全に人間世界を放棄する過程は蒲松齡の当時の社会政治に対する希望が次第に消えていき、ついに完全に脱俗的な態度を取つて、理想の世界に憧憬する人間になる過程を示している。

一方、太宰にとつては、こうした蒲松齡の現実への絶望や仙界への執念よりも、道教への反感が先行したものとと思われる。これは「竹青」直後に執筆した「惜別」の中で、若き日の魯迅をして、「日本では支那を儒教の国のやうに思っています、支那は道教の国です。不老長寿の迷信です。日本では、そんな不老不死のほうには、てんで見向きもしません。いい笑ひ草にしています。仙

人といふ言葉を、白痴か気違いの代名詞くらいに考えています。」
と云つて恥ぢさせている。また、太宰が内閣情報局に提出した文
書にも、中国の病弊の原因として、「明らかに精神の病ひのせいだ
ある。すなわち、理想喪失といふ怠惰にして倨傲の恐るべき精神
の疾病の瀰漫に拠るのであるといふ結論を得るに到りました」(注
5)と述べている。この感想はそのまま太宰の道教観を示すもの
といつてよい。道教的なアニミズムと蒲松齡の絶望のみなざる「竹
青」について、仙界や道教を否定する太宰はその本質を完全に変
革したのである。

二、「聊齋志異」の「竹青」に欠け、太宰が新たに加えた点

(1)

この魚容君など、氏育ち共に賤しくなく、眉目清秀、容姿また
閑雅の趣きがあつて、書を好むこと色を好むが如しとは言へない
までも、とにかく幼少の頃より神妙に學に志して、これぞといふ
道にはげれた振舞ひも無かつた人である。(「竹青」)

魚容と父母そして祖先の由緒正しさの称賛から書き起こし、魚
容が出自を裏切らずに幼少期から學問の志を持っていたことを伝
えている。その學問への自負心こそは早くに父母を失い現在に至
るまでの不幸な境遇下での、心の支えかもしれない。さらには魚
容が魚容であることの、唯一の自己存在の証明でもあつたと言え
るだろう。たとえ叔父や嫁との生活で抑圧されてもその志がある

限り自分を見失うことはない、彼は考えていたと思われる。

(2)

ひとりの酒くらひの伯父が、酔餘の興にその家の色黒く瘦せこ
けた無學の下婢をこの魚容に押しつけ、結婚せよ、よい縁だ、と
傍若無人に勝手にきめて、魚容は大いに迷惑ではあつたが、この
伯父もまた育ての親のひとりであつて、謂はば海山の大神人に違
ひないのであるから、その酔漢の無禮な思ひつきに對して怒る事
も出来ず、涙を掬へ、うつろな氣持で自分より二つ年上のその瘦
せてひからびた醜い女をめぐつたのである。女は酒くらひの伯父
の妾であつたといふ噂もあり、顔も醜いが、心もあまり結構でな
かつた。魚容の學問を頭から輕蔑して、魚容が「大学の道は至善
に止るに在り」などと口ずさむのを聞いて、ふんと鼻で笑ひ、「そ
んな至善なんでもに止るよりは、お金に止つて、おいしい御馳
走に止る工夫でもする事だ」とにくしくしげに言つて、「あなた、
すみませんが、これをみな洗濯して下さいな。少しは家事の手助
けもするものです」と魚容の顔をめぐけて女のごれ物を投げつ
ける。(「竹青」)

ここに描かれているのは、女房と伯父の生活状況を示すものだ。
およそ學問とは遠くかけ離れたところに、彼らの生活があるとい
うことである。魚容を引き取つた伯父が期待していたことは、魚
容があくまで家を継ぐ跡取りになつてくれることであり、一緒に
なつた女房にとつては、家の面目を守り家庭を大事にし、子孫を

産み育てることが生きるすべてなのであって、そうした彼らの生活にそぐわない魚容の学問は、何の役にも立たない無用のものであったはずである。そのため学問への情熱は魚容を支えたのであるが、不遇を招来させる原因ともなったのである。

(3)

早く父母に死別し、親戚の家を轉々して育つて、自分の財産といふものも、その間に綺麗さっぱり無くなつてゐて、いまは親戚一同から厄介者の扱ひを受け、ひとりの酒くらひの伯父が、酔余の興にその家の色黒く痩せこけた無學の下婢をこの魚容に押しつけ、結婚せよ、よい縁だ、と傍若無人に勝手にきめて、魚容は大いに迷惑ではあつたが、この伯父もまた育ての親のひとりであつて、謂はば海山の大神人に違ひないのであるから、その酔漢の無禮な思ひつきに對して怒る事も出来ず、涙を泳へ、うつろな氣持で自分より二つ年上のその痩せてひからびた醜い女をめとつたのである。女は酒くらひの伯父の妾であつたといふ噂もあり、顔も醜いが、心もあまり結構でなかつた。(「竹青」)

魚容を取り巻いている環境の説明として二人の人物を登場させている。一人は「酒ぐらひの伯父」で、自分の妾を魚容に押し付ける下品な人間である。もう一人は妻であり、伯父の妾でもあつた、「顔も醜いが、心もあまり結構でなかつた」人である。太宰は主人公の經濟状況および周囲の環境を厳しく設定しており、結果として、魚容と周りとの衝突は避けられないことが暗示されてい

る。後に郷試に出るのは立身出世のためというよりむしろ、故郷での苦しい生活から逃げ出したいためと言つたほうが妥当であろう。試験に落第して自殺しようとするほどの絶望は、厄介者扱いされ、と妻からの虐めを受けていた故郷に帰らざるを得ないことが原因になつていゝと思われる。

三、太宰治の「竹青」と「聊齋志異」以外の中国古典との関連

太宰治の「竹青」は「聊齋志異」の「竹青」以外に、論語・中庸・唐詩・楚辭等を訓読のまま引用したり、幾らか変えて用いている。次にそれらの点について、それぞれ一例を挙げておこう。

(1)

『よし、行かう。漢陽に行かう。連れて行つてくれ。逝者は斯の如き夫、昼夜を捨てず。』てれ隠しに、甚だ唐突な詩句を誦して、あははは、と自らを嘲つた。(「竹青」)

「子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜」(「論語」子罕第九)

孔子が、ある時、川のほとりに居て、流れてやまない川の水をながめて永嘆してゐるには、過ぎ去つて帰らぬものは、すべてこの川の水のようであろうか。昼となく夜となく、一刻も止むことなく、過ぎ去つていく。人間万事、この川の水のように、過ぎ去り、うつろつていくのだろう。(「論語」、『新釈漢文大系』第一巻、明治書院、一九六〇年五月、二〇四頁)

周知のように、孔子は自分の思想を宣伝するために、一生をかけて諸国を回ったが、その思想は結局、諸国に受け入れられなかった。その上自身も知らず知らずのうちに老いて来た。この詩句は川の水の不断の流れのように、むなしく老いていくわが身を、孔子が詠嘆したものである。ここでは、「逝者」は速やかに過ぎ去った歳月を指すと考えていいだろう。「不舍昼夜」は昼夜を問わずに流れていくという時間の特性を表現する言葉であろう。けれども太宰の「竹青」においては漢陽に行こうとすれば夜であってもいますぐ出発しようという意味に用いられている。太宰はこの文句に基づき、これを本当の意味と切りはなし茶化している。

(2)

『君子の道闇然たり、か。』魚容は苦笑して、つまらぬ洒落を言ひ、『しかし隠に素ひて怪を行ふ』といふ言葉も古書にある。よろしく窓を開くべしだ。漢陽の春の景色を満喫しよう。』(「竹青」)

「詩曰、衣錦尚絢。惡其文之著也、故君子之道、闇然而日章。小人之道、的然而日亡」(「中庸」)

『詩』には、『錦の衣の上には、薄い衣を羽織っている。(その美しさよ)』とある。(薄い衣を羽織るのは)錦のあやが外にけばばしく現れるのをきらうからであって、(錦を内にひめてこそ美しさをはえる)。この道理で、君子の守り行う道は、(ちよつと見ただけでは)まっくらで(なにもわからないが)、日がたつにつれ

て(その善さが)あざやかになる。(これに反して)小人の行う道は、(ちよつと見ただけでは)あかあかと輝く(ばかり善いようだが)、日がたつにつれて消えうせてしまう。(「大学・中庸」、『新釈漢文大系』第二巻、明治書院、一九六七年四月、三一五頁)

「子曰、素隠行怪、後世有述焉、吾弗為之矣。」(「中庸」)

孔子が言う、なみなみの人には知れない道理を探り出したり、人には行いがたい甚だ風変わりなことをしたりするのは、後の世になっても、それをほめそやして、引き継ぐかもしれないが、私はそんなことをしない。(「大学・中庸」、『新釈漢文大系』第二巻、明治書院、一九六七年四月、二二〇頁)

すぐ前の「その部屋は暗く、卓上の銀燭は青煙を吐き、垂幕の金糸銀糸は鈍く光つて、寝台には赤い小さな机が置かれ、そのうえに美酒佳肴がならべられて」(「竹青」という描写からみると、その部屋は新婚夫婦の部屋であることがわかるだろう。魚容が新婦の竹青に誘われるときの気まづさを緩和するために、部屋の暗さについて「君子の道闇然」と駄洒落を飛ばした。すぐその唐突さに気づいて「素隠行怪」という言葉を言い、自分の言葉の合理性を説明した。

太宰は「中庸」の「君子之道、闇然而日章」を「君子の道闇然」に、「素隠行怪、吾弗為之矣」を「隠に素ひて怪を行ふ」(素隠行怪)に省略し、また元来の意味を完全に無視し、実際よりは浅薄な意味に用いて駄洒落とした上で、気取った滑稽さを出している。

作者の道化や饒舌の傾向が現われている。

(3)

近づくにつれて、晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲、對岸には黄鶴樓の聳えるあり、長江をへだてて晴川閣と何事か昔を語り合ひ、帆影點々といそがしげに江上を往来し、更にすすめば大別山の高峰眼下にあり、麓には水漫々の月湖ひろがり、更に北方には漢水蜿蜒と天際に流れ、東洋のヴェニス一眸の中に取り、「わが郷関何れの處ぞ是なる、煙波江上、人をして愁えしむ」と魚容は、うつとり呟いた時、竹青は振りかへつて（「竹青」）

昔人已乘黄鶴去、此地空餘黄鶴樓。黄鶴一去不復返、白雲千里空悠悠。晴川歴歴漢陽樹、芳艸萋萋鸚鵡洲。日暮郷関何処是、煙波江上使人愁（崔顥「黄鶴樓」）

昔この地に現れたという仙人は、すでに黄鶴に乗って天上に去り、この地にはただ黄鶴楼が残っているばかり。黄鶴はひとたび去ってまた返らず、白雲ばかりが千年後の今日まで、変わることもなく流れている。晴れ渡った長江の向こうには、漢陽の樹々がありありと見え、鸚鵡洲には芳草がいちめんに美しく生い茂っている。はや日も暮れかかってきた。わが故郷はいずれかたであろうか。夕もやのかかった水面の、蒼茫たる眺めは、まことに私の胸に、望郷のたえがたい思いを起させるのである。（『唐詩選』、『新釈漢文大系』第十九卷、明治書院、一九六四年三月、五〇四頁）

これは中国の名所である黄鶴楼周辺の景色を描く詩であったが、太宰はその詩句を訓読引用し、漢陽あたりの景色を詩的に描写したのである。つまり『世界地理風俗大系』に載っている唐詩を借り、イメージを作つて、「晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲」というような詩的だめでたく平和な景色を作り上げている。こういう主人公を取り囲む環境を描写する所は「聊齋志異」の「竹青」よりすばらしいと思われる。また「日暮郷関何処是」を「わが郷関何れの處ぞ是なる」と変えて、魚容の望郷の気持ちを詩的にまた滑稽に表し得ている。

(4)

生きて甲斐ない身の上だ、むかし春秋戦国の世にかの屈原も衆人皆酔ひ、我独り醒めたり、と叫んでこの湖に身を投げて死んだとかいふ話を聞いてゐる、乃公もこの思い出なつかしい洞庭に身を投げて死ねば、或ひは竹青がどこかで見てゐて涙を流してくれるかも知れない、乃公を本當に愛してくれたのは、あの竹青だけだ、あとは皆、おそろしい我慾の鬼ばかりだった、人間萬事塞翁の馬だと三年前にあのお爺さんが言つてはげましてくれたけれど、あれは嘘だ、不仕合せに生れついた者は、いつまで経つても不仕合せのどん底であがいてゐるばかりだ、これすなわち天命を知るといふ事か、あはは、死なう（「竹青」）

「屈原曰、举世皆濁、我独清。衆人皆醉、我独醒。是以見放」（屈原「漁父」）

屈原が『世間中の人々はみな濁って汚れているのに、私だけが清んで正しい。衆人はみな酔って道理が分からないのに、私だけが醒めて道を守っている。こういうわけで私は追放されたのである。』と言う。〔楚辞〕、『新釈漢文大系』第三十四卷、明治書院、一九七〇年九月、二七九頁）

屈原のわが身が追放された原因を喝破した言葉である。中国では今でもよく知られている有名な言葉で、自身と社会との対立を強調する言葉である。太幸はこの文句を引用し、再び落第して故郷に帰るには面目ないし、何の希望もないという魚容の人生に対する絶望と感慨を表現している。けれども屈原の絶望は世俗との対立に起因しているのに対して、魚容の絶望は落第が原因になっているから、この言葉の引用は無理やりに人に与えざるを得ない。付け加えて言えば、屈原は洞庭湖ではなく汨羅江に身を投じたのであるが、太幸がなぜ、「むかし春秋戦国の世にかの屈原も衆人皆酔ひ、我独り醒めたり」と叫んでこの湖に身を投げて死んだとかいふ話を聞いてゐる」というように書いたのかは、不明である。

終わりに

「聊斎志異」の「竹青」と比べると、太幸の「竹青」のすばらしい点は主人公を取り囲む環境を描写するに際して、『世界地理風俗大系』に載っている唐詩を借り、イメージを作って、「近づくに

つれて、晴川歴々たり漢陽の樹、芳草萋々たり鸚鵡の洲、対岸には黄鶴樓の聳えるあり、長江をへだてて晴川閣と何事か昔を語り合ひ、帆影点々といそがしげに江上を往来し、更にすすめば大別山の高峰眼下にあり、麓には水漫々の月湖ひろがり、更に北方には漢水蜿蜒と天際に流れ」というような詩的めでたく平和な景色を作り上げていることだと思われる。

また、「論語」、「中庸」、「楚辞」などを巧みに引用したり、改変して用いたりすることによって、時には『よし、行こう。漢陽に行こう。連れて行ってくれ。逝者は斯の如き夫、昼夜を捨てず。』てれ隠しに、甚だ唐突な詩句を誦して、あははは、と自らを嘲つた」というように自分の才能と学問をひけらかし、時には『君子之道闇然たり、か。』魚容は苦笑して、つまらぬ洒落を言ひ」というように駄洒落を飛ばし、時には「一奮発して、大いなる声名を得なければならぬ」というように意気込み、時には「あああ、この世とは、ただ人を無意味に苦しめるだけのところだ」というように世を恨むという、気まぐれで、ややひねくれた道化者を作り上げている。太幸の作品に頻出するこうした道化的人物の描写の典型例としては「人間失格」の中の「自分は、下男や下女たちを洋室に集めて、下男のひとりに滅茶苦茶にピアノのキイをたたかせ、(田舎ではありましたが、その家には、たいいていのものが、そろつておりました)自分はその出鱈目の曲に合わせて、インデヤンの踊りを踊つて見せて、皆を大笑ひさせました。次兄は、フラッシュを焚いて、自分のインデヤン踊りを撮影して、その写真が出来たのを見ると、自分の腰布(それは更紗の風呂敷でした)の合せ

目から、小さいおチンポが見えてゐたので、これがまた家中の大
笑ひでした。自分にとつて、これまた意外の成功といふべきもの
だったかも知れません」といつた描写が思い出される。しかし、
人間の営みというものが何もわからず、自分ひとりだけが變つて
いると思ひこみ、不安と恐怖に襲われるばかりで、「人間に対する
最後の求愛」の手段として考え出した道化の暗さは「竹青」には
見られない。

〔付記〕 本稿における「竹青」の引用は『太宰治全集』第七卷
（筑摩書房 一九九八年十月）に拠つた。

注

（注1） 両者の比較については拙稿「太宰治と中国古典（一）―

「清貧譚」と「聊齋志異」の「黄英」との比較―」（『近

代文学論集』 第三七号 二〇一一年十一月）を参照。

（注2） 電報通信社 一九四四年十一月創刊。

（注3） 菊田義孝 『竹青』についての思い出 「太宰治研

究」第一号 一九六二年十月 六四頁。

（注4） 「聊齋志異『竹青』について―太宰治『竹青』との比較

―」 『集刊東洋学』 第二十九号 一九七三年六月 一

七三頁。

（注5） 『惜別』の意図 『太宰治全集』 第十一卷 筑摩
書房 一九九九年三月。